



日本GAP
No. 12

仙台支部報

IGAP-JAPAN SENDAI INFORMATION

頒価 無料/送料60円(切手可)

○編集人: 安藤澄雄

○発行人: 笠原弘可(山合支部代表)

申込先 〒980 仙台市東10番丁1

国鉄アパート1-18

参加者 49名! 第4回日本GAP山形・仙台合同支部大会

報告記

祝福の集い

「祝福の想念を持つ人たちが集まれば、そこはすなわち天国そのものである」——第1回日本GAP山形・仙台合同支部大会(1980年5月25日)後の久保田会長のご感想であるが、ご出席いただいた方々にはもとより、太陽を含めた大自然にも祝福された本大会は、まさに天国そのものであったと言っても過言ではあるまい。

以下、編者(安藤)の目から見た(少し偏った)報告と感想にしばしおつきあい願いたい。

Hello,米沢!

5月21日(土)、夜勤明けの眠い目をこすりつつ、東北新幹線と奥羽本線を乗り継いで、午後3時半ごろ米沢市(山形県)に着いた。ホテルチェックイン後、この日行われた清水正さんと敏恵さんの結婚披露宴出席者のうち、GAP会員だけの記念写真を撮るために会場に向かった。

米沢を訪れるのは2度目だが中心街を見るのは初めてだ。タクシーの窓から見える家並は江戸時代に戻ったようで、あちこちに黒い板壁、白い土蔵が見られる。北海道育ちの妻・博子は「まるで外国に来たみたい」と珍しそうにキョロキョロしていた。(実は私も……)

撮影後、ホテルで夕食会を開いたが、会長はお疲れのようで、早目にお休みになった。小雨が降っている。てるてる坊主……

誠実な講演

明るく22日(日)、昨夜とは打

って変わって快晴! ..とはいかなかったが、とにかく晴れた。出席者数も最終的には千葉県の鈴木一宏・富子夫妻の長男・摩耶ちゃん(1歳半)を入れて49名に達し、意外の多人数を迎えた受付嬢は大忙しだった。

10時30分、柴田文字さんの司会により開会し、8ミリ映画の上映が始まった。これは昨年の海外研修旅行の記録だが(撮影: 大阪府・斎藤康美氏)私と妻は、その中で二人っきりで長く写っている場面があるのを3月の松山支部大会で見えて知っていたので、役員としての仕事があるふりをして会場を抜け出した。もういいだろうと思って戻るとちよどその場面で、あわてて飛び出した。後で柴田さんに「いいわね」と冷やかされ、大いに照れた。

午後は、山形大学生の伊藤陸史(いとう・ちかし)氏、上市市在住で山形支部初代代表の漆山晃治(うるしやま・こうじ)氏、そして久保田八郎日本GAP会長の3氏の講演が続いた。

「自然科学とアダムスキー哲学」と題する伊藤氏のお話は、細胞分裂を促している「何者かの意志」に着目し、それと物理学の「場」との関係を考察したもので、特に物理学の視点から「宇宙は無である」と導き出したあたりはユニークだった。外に「場」の応用などの話もあるが、山形支部報に詳しい内容が掲載されるそうなのでそれをお読みいただこう。

続く漆山氏は「アダムスキー哲学に接して」という題で、山形支部設立の経過と氏の貴重な

体験を紹介された。「社会に役立つ人間になれ」という印象を受けてアダムスキーの著書に出合う経緯、青年団・職場・家庭における実践談などを聞いていると穏やかな表情の奥に秘められた強烈な信念を感じないではいられない。そして次の結びの言葉こそは氏の生き方を示しているに違いない——「社会が不景気で厳しい環境の中にあっても、自分の気持ちの持ち方は全く自由であります」

力強い言葉

そしていよいよ久保田会長の登場である。今回の演題は「宇宙の法則の生かし方」で、約1時間半にわたるお話は出席者一同を引き込み、いやが上にも会場のふんいきを盛り上げた。

私は役員の仕事があり、たびたび席を外さねばならなかったため、会長のお話のすべてを伺うことはできなかった。しかし合間をみて拜聴したお話にはいつでも体験からにじみ出た、聞く者を勇気づける力が宿っているのを感じさせられた。

お話はそれぞれ重要な意味を含んでいるが、紙面の都合上、私にとって印象の強かった部分をご紹介するにとどめたい。

お話も後半に入り、明るい澄みきった想念を持つ重要性を説いておられた。毎日、鏡を見てはほほ笑むようにするといとおっしゃった後「こんなふうに」と言って突然ニコッとされた。その表情のかわいらしさ(?)に一同は爆笑した。私も声を出して笑いながら、ふと学生時代を

仙台市 安藤 澄雄

思い出した。当時の私は今以上に神経質で、笑顔ともあまりつき合わずに暮らしていた。そのせいか、遂に体調を崩した。その時にやはり会長から「鏡の前ではほほ笑む」方法を伺い、それを実行することによってどうにか窮地を逃れることができた。そんなことを思い出しながらこの宇宙哲学も楽しみながらやってこそしっかり身につくのであり、他人に対しても、そして自分に対しても明るく振舞うことによってますます明るい未来がやってくるのだろうと考えていた。

美しい心

大会を5時に閉会し、6時からは会場をホテルサンルート米沢に移して夕食会を開いた。この夕食会では、前日に結婚式を挙げられた清水正さん・敏恵さんのために、有志が工夫をこらし、お二人のご両親もお招きして盛大にお祝いをした。

詳細をお伝えするには紙面が少なすぎる。とにかく美しかった。お二人の衣装も美しかったが、それにも増してお二人を祝福しようと集まった方々の心の中はまぶしいほどに美しかったに違いない。

お二人の幸せを祈りながら、私はいつの間にか我が愛妻をしみじみと見つめていた。

またいつか

翌23日(月)はスカッとした空の下、大自然の緑の中を総勢30名で福島までドライブした。スカイパレー(有料道路)では残雪や白い滝が心まで洗ってくれるようだった。



「心を大きく開けば開いていくほど、
彼らもそうしてくれます」

この記事は、去る5月7日の東京例会におけ
る山口氏の体験講演の原稿をもとにしました。
氏の体験には運命的な「何か」を感じます。

出会いの中で

船橋市

連載第1回 山口緑

私はだれ?

私は山形県という、とてつもない田舎に4人兄妹の二男として、農家に育ちました。家はあまり裕福ではありませんでしたが、父母の愛情に包まれ、また自然の恵みに抱かれて20数年間を過ごすことができました。

私は幼いころから自分自身がなぜこんなふうにして生きているのかということ非常に不思議に考えていました。そして自分がなぜこんな場所で、なぜ人間として生きているのかをしきりに考え続けてきたように思います。もし私がカエルだってもいいだろうに、あるいは野辺に咲く一輪の花であってもいいの

ではないかと、しきりに考えていました。きっと自分の正体を知らなかったのに違いありません。

何のために

自然の中で生活できたおかげで、自然の営みをとても丁寧に観察できたり、その営みの素晴らしさに感動して生きてきました。家業が農業でしたから、幼いころから父や母の後について田や畑をめぐり歩き、自然相手の毎日を送りました。

雨や風は人間に厳しく、肉体的労働を強いられ、何でこんなに苦勞してまで働き続けねばならぬのだろうか、父や母を見ては考えていました。日曜や祭日

は農家にはありません。朝から晩まで、モクモクと働きづめです。一体何のために生き、何のために存在しているのか、どうしても理にかなった解答は出てきませんでした。きれいな服を着て車に乗って会社に行く方がよほど楽で裕福な暮らしができるだろうにと、いつも考え続けていました。

名前の意味

私はあることに関していつも両親に不満を持っていました。というのは私の名まえについてです。私は自分の名まえがいやで、何とかしてこれが消えはしないかとよく考えていました。いつも女の人にまちがえられ、自己紹介が憂うつでした。なぜうちのとうちゃん、もっと男姓らしい、カッコいい名まえにしてくれなかったのかと、いつも不満でたまりませんでした。

しかし、このごろになって、どうしてこの緑という名まえをつけたのかと尋ねてみたところ、「みどりというのは自然を意味し、おまえが自然のように調和のとれた人間になるようにと願ってつけた」というような意味のことを語ってくれました。私はその時、父が単なる気まぐれでこの名をくれたのではなく、「神のごとくに生きるように」という願いがあったのだと再認識させられたのです。

それに最近、どうしてこの名が私に与えられたのか、という意味も別な方面から気づくことができましたので。

(つづく)

山口緑(やまぐち・みどり)

昭和31年8月16日生まれ
現在小学校教員(2年生担任)

日本GAP 仙台支部 ★月例研究会

一人で生きるよりは二人で生きるほうが楽しい。二人で歩くよりは三人で肩を組みながら歩くほうが力強い。手と手をつないで、笑い、歌い、励まし合いながら生きて行こう!

仙台支部でも、宇宙哲学をより深く理解するために、毎月1回研究会を開いています。お茶あり、お菓子あり、冗談ありの楽しい仙台支部月例研究会に、あなたもお気軽にご参加下さい。

◎日時/毎月第4日曜日
13時10分～16時20分
◎会場/仙台市市民会館会議室
(西公園内。仙台駅からタクシーで約10分、徒歩約30分)

◎会費/300円
◎持参品/テキストとしてアダムスキーの『宇宙哲学』
◎その他/終了後、希望者による夕食会を開いています。(酒もあり!)
会費は1500円前後。

編集後記

◎第1面の記事の通り、山形・仙台合同支部大会は今年も大盛況のうちに終了することができました。遠路、そしてお忙しいなかをお越し下さいました皆様には衷心より御礼申し上げます。

◎去る4月24日の編者の結婚に際しましてはたくさんの方々に祝福の想念を頂戴いたしました。この紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。

◎仙台市内に住むようになってから、特に自然の有難みを感じています。田舎にいたころは当たり前のものであった静けさや夜空の星の輝き、カエルの鳴き声、小鳥のさえずりも、国道に面したこのアパートでは無縁のものとなりました。たまたま妻と二人で私の田舎に遊びに行くと静かであることが不思議に思えるほどに感動します。——自然が美しい季節です。(A)

草原

***** 生命の季節 ***** 笠原弘可

緑のそよ風——という唱歌が最も似合う季節である。昼はサラッと暑く(そう、確かに真夏の執ような暑さとは違う)夜はスーと薄寒い(これも暖房のいる寒さにはほど遠い)。一年中で一番呼吸しやすい時候と言える。と、夜も夜中の机の上で、思い出したように書きつづっている自分が、多少哀れではある/精神的に余裕があり、かつ注意深い人間であるならば、こんな事はとうの昔に気づいて、少なくとも3週間位前には気づいて感嘆していなければならない。そして、大気の新鮮さに、光の優しさに、外出する度感謝して微笑んでいなければならないのだ。何という鈍感ぶりだ。創造主の前に深く頭を下げて謝らねばならない。精々、先月の合同支部大会の翌日吾妻連峰の合間をドライブした時に、深呼吸した位で、その後は人間という猛獣の住むコンクリート・ジャングルでせわしく浅い呼吸をして息苦しく時を走り回っていたに過ぎない/私の人生には、まだまだ山や谷やらが待ち構え、ある所には川が横たわっているかも知れない。私は泳ぎが苦手なのでなるべく陸路が望ましいが、そうせたくばかり言ってはられない。私には私の地球で遂行すべきことがあり、マスターすべきものもあるだろう。コンクリート・ジャングルがどうの、川がイヤのと、弱気ではいけない/とすると、生活のめまぐるしい車輪の中で自己を見失いそうになる。ガラスの破片が散らばったような人間関係の狭間で「いのち、を忘れそうになる。そんな人間の心をいやしてくれる季節を、創造主はちゃんと用意して下さった。——草原の季節である——